

ベトナムから世界へ！

門西 由佳（大竹市立大竹小学校） 担当教科／全教科

実践教科／総合的な学習の時間・道徳・学活 対象学年／第5学年 対象人数／3クラス 合計115名

実践の目的

- ・ベトナムで見たもの聞いたものを通して、異文化を感じさせる。
- ・ベトナムで活躍されている日本人の方々の活動を通して、日本の技術の素晴らしさに気付かせ、日本人としての誇りをもたせる。
- ・ベトナムでのJICA事業や日本におけるNPOの活動を通して、世界の貧困について考えさせ、日本の国だけでなく、自分たち自身が協力できることがあることを知らせる。
(自分たちの生活を振り返り、食べ物の大切さや物を大事に使うことなどについて、真剣に考えさせる。)

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	(事前学習1) 「世界がもし100人の村だったら」 ★自分で役割を演じることによって、世界の不平等さを体で感じる	○ワークショップ「世界がもし100人の村だったら」 ・世界の国の数 ・男女比 ・地域ごとの人口 ・文字が読めないということ ・学校に行けない子ども達の数 ・世界の人口 ・世界の言語 ・富の不均衡	世界地図 ビニールひも (大陸作成用) あめ(富の不均衡用) ペットボトル3本 (水、薬、毒用)
2	(事前学習2) 「日本の文化を紹介する物を作ろう」 ★習字や折り紙が、日本の美しい文化であることを確認し、ベトナムの子どもたちへのお土産を作る	○小さい半紙に自分で選んだ漢字一字を書き、和紙に貼る ○折り紙で、鶴や自分が折れる物を作る	半紙 和紙 折り紙
3	「学校に行きたい！」 ★世界の貧困と国際協力について知る	○JICA資料「学校に行きたい！ 国際協力とわたしたち」を2～4ページずつ読む (朝読の時間10分×3日)	JICA資料のコピー
4 ・ 5	「ベトナムについて」 ★ベトナムの町や生活の様子など、異文化を見て聞いて感じる	○ベトナムで撮ってきた写真や動画を見て聞いて、自分たちの住んでいる日本とは違う文化を感じる ○アオザイやムオン族の民族衣装、ベトナムの5年生用の教科書など、実際に物を見て触って感じる	写真／動画 アオザイなど

6	<p>「世界中には困っている人たちがたくさんいる～貧困とは？～」</p> <p>★世界中には困っている人たちがたくさんいることを知るために、貧困について考えを深める</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○グループで、「貧困」についての派生図を作成し、他グループの考えを共有し評価し合う ○フジテレビ「世界がもし100人の村だったら」の中の、フィリピンのスマヨキーマウンテンで生活する12歳の少女の映像を見せて、働く子どもたちの現状と生活環境について考えさせる 	グループ用ワークシート 映像
7	<p>「貧困からぬけ出すために、日本の国ができること」</p> <p>★国際協力の中の、ODAについて知る</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○個人で、そしてグループで考えを出し合った後、ベトナムで出会ったJICA事業や青年海外協力隊員の活躍などを紹介する 	個人用ワークシート グループ用ワークシート
8	<p>「世界じゅうの子どもたちとともに～ぼくたち・わたしたちができる国際協力～」</p> <p>★国際協力の中のNGOの活動や個人でできることについて知る</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○個人で、そしてグループで考えを出し合った後、様々なNGOの活動を紹介する ○世界の子どもたちの夢、世界の貧困についての写真、子どもたちに考えてもらいたいことなどをメッセージにして、パワーポイントで流す 	個人用ワークシート グループ用ワークシート 写真 パワーポイント
9	<p>「同じ空の下で」</p> <p>★同じ地球に生きている、同じ人間として国際親善を考える</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○道徳の教材文「同じ空の下で」を読み、今までの学習のまとめとして、ふりかえりを書かせる 	道徳教科書
10	<p>「幸せとは…」</p> <p>★絵本の読み聞かせを聞き、本当の幸せについて考える</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○絵本「幸せを売る男」の読み聞かせをし、「幸せ」について考える ○国際協力のあるべき形について、JICAベトナム事務所で聞いた話を紹介し、幸せとの関連について知らせる 	絵本「幸せを売る男」

この授業に注目！

事前学習 1 世界がもし100人の村だったら

ねらい：自分で役割を演じることによって、世界の不平等さを体で感じる。

★「世界がもし100人の村だったら」ワークショップとは、世界を100人の村に見立て、参加者がその中の一人の役割を担って、世界の現状を体感するゲーム方式のワークショップである。今回は第5学年1組37名、2組39名、3組38名を対象に3回実施した。

児童の反応

- ・北アメリカの役割をしてみて、人は少なくともたくさんのお金が入ってきて、ちょっとうれしかった。でも全くもらえない国もいたし、そんな国もあるんだなと思った。
- ・7200万人も学校に行けない人がいると聞いてびっくりした。もっと学校に行ける人が増えるといいと思う。

所 感

- ・このワークショップは、5年生の子どもたちにもとても分かりやすかったようで、楽しんで活動していた。
- ・大陸（地域）ごとの人口密度を実際に体で感じることで、視覚的にもはっきりと伝わったと思う。
- ・給料と称した飴をもらう時も、人口の多いアジアにはたったの10個で、しかもそのうちの半分が日本に取られてしまったり、アフリカには一つももらえなかったりと、自分の立場に立って感じたり考えたりできていたようである。
- ・ファシリテーターとして振り返ると、約40人の児童を一度の動かすことの難しさを感じた。児童には楽しい活動だったようで盛り上がっていたが、それだけにもっと指示を明確にし、テンポ良く進行していく必要があったと反省している。
- ・活動状況だけをみていると、ねらいが達成されたかどうかは疑問であったが、児童の振り返りを読むと、子どもなりに世界の不均衡・不平等を体験できていたと判断できる。

事前学習2 日本の文化を紹介する物を作ろう

ねらい：習字や折り紙が、日本の美しい文化であることを確認し、ベトナムの子どもたちへのお土産を作る。

児童の反応

- ・習字や折り紙が、外国で喜ばれるとは知らなかった。
- ・自分たちが書いたり作ったりした物が、ベトナムの子どもたちに届けられるのはうれしいな。
- ・折り紙でいろんな紙飛行機を折るのが楽しかった。

所 感

- ・日本の文化について再認識する機会にもなり良かった。
- ・習字は書く枚数を自由にしたが、児童によっては10枚も意欲的に書いておりうれしかった。



3限目 学校に行きたい！

ねらい：世界の貧困と国際協力について知る。

- 「開発途上国」ってどんな国？
- 開発途上国の子どもたちは、どんなことに困っているの？
- 開発途上国の子どもたちは、どんな暮らしをしているのだろう？

○どうして学校にいけないんだろう？

学校に行けないと…？～勉強することは生きていくうえでとても大事なこと！～

今後の授業の導入として開発途上国の現状について知ってもらいたいと思い、JICA資料「学校に行きたい！国際協力とわたしたち」を使うことにした。そこで、朝の読書タイム（10分間）を使い、1日数ページずつ一人ひとり静かに読ませ、気づきを書かせた。その中で、開発途上とはどういう国々なのか、そしてそれらの国ではどんなことに困っているのか、学校に行けないとはどういうことなのか、について考えさせた。

児童の反応

- ・自分の家に水道がなかったら、食べ物も食べられないし、飲み物も飲めないとしても困る。
- ・自分たちは学校に行けることが当たり前だと感じていたけど、感謝しなければいけないと思った。

所感

- ・子ども向けのとてもよい教材で、写真や資料で読みやすくできていると感じた。
- ・子どもたちにとっては、個人での活動だったが、細かいところまでじっくり読んで、感想や質問（「ルワンダの少年は13歳なのに小3って何で？」「朝から晩まで働いても、かせげるお金は100円～200円って、ほんと？ありえない！」など）をしてってくれた。

4・5限目 ベトナムについて

ねらい：ベトナムの町や生活の様子など、異文化を見て聞いて感じる。

○モー村のムオソ族の、昔ながらの伝統的な生活の様子

○ハノイ、ホーチミンなど大きな町のにぎやかな様子

できるだけ写真や映像などを厳選して、集中力を切らさない量を見せるようにした。

また、ただのお楽しみにならないように、キーワードのみをメモするよう指示した。そして、そのメモを使って、見終わってからベトナム・ビンゴのゲームをした。誰もがメモしたキーワードを言った児童には、「大事なところを聞き逃さなかったね」とコメントし、誰も書いていないようなキーワードだった場合には、「よく、そんなことも聞いていたね！」と褒め、自己肯定感を高めるよう努めた。

〈児童から出てきたキーワード〉

- ・モー村　・ムオソ族　・バイク　・ホーチミン　・バンブーダンス
- ・ノンラー　・バナナ酒　・高床式　・水たばこ　・アオザイ　など

児童の反応

（モー村）

- ・ムオソ族の高床式住居では、トイレが外にあることにビックリした。
- ・ニーという楽器はバイオリンみたいな音がする。
- ・水たばこなんて知らなかった。あんなに大きいタバコがあるなんて驚いた。
- ・バナナ酒を初めて見た。どんな味がするのかふしき。
- ・暑い国なのに、民族衣装が長袖で暑そう。



(ハノイ・ホーチミンなど)

- ・バイクが多くてすごい。信号待ちのバイクの波がすごかった。
- ・信号のない道路を渡る時に「走らない・止まらない・戻らない」というルールがあることを知った。こわい。
- ・水上人形劇の人形の顔がおもしろかった。どうやって操っているのか知りたい。
- ・アオザイがきれい。

所 感

- ・日本と違う所を多く発見しては、その度に歓声を上げて驚いていたので、いい意味で多くのカルチャーショックを受けてくれたと感じている。

【教室のベトナムコーナー】



6限目

「貧困」とは？

ねらい：貧困についてのイメージや、そこから派生する問題点について意見を出し合い、共有する。

※ベトナムでの経験を伝えて、外国について、異なった文化について視野を広げた後に、もっと広い世界に目を向けてもらうために、「貧困」について考えてもらうことにした。

世界の「貧困」を通して自分たちの生活を振り返り、食べ物の好き嫌いをしていることや、物を大事に使っていないことについて反省し、これから自分の生活を見直すことにつなげてもらいたいと考えた。また、自分でもできる国際協力（募金、ペットボトルのキャップを集めるなど）をしたいと考える気持ちを育てたかった

- 「貧困」についてのイメージを、グループごとに派生図に表す。
- 自分のグループのワークシートを隣のグループに回し、交流する。自分のグループでは出なかつた意見や、なるほど！と思う意見にはシールを貼り、自分のグループの番号を書き入れた。
- フィリピンのスマヨーマウンテンで生活する12歳の少女マニカの映像を見せ、貧困とは何かを考えさせる。

児童の反応

- ・他のグループの意見を見て、自分たちには出なかった「身分の差」、「妹や弟のために学校をやめる」「弟や妹の世話をしなければならない」などの意見があつてすごいと思った。
- ・自分にはなかった「貧困」についての考えが書いてあるのを見て、イメージが広がった。

所感

- この活動にとっては、シールの数が問題なのではなく、他のグループの意見を真剣に交流し合ったという意味で、意義深い活動になったと思う。
- 「貧困」とはいろんな困難を引き起こすということ、そしてそれらの困難から抜け出すことは、開発途上国の人たち自身の努力では不可能であることを感じてもらうための活動だった。次時へつなげいくための有意義な活動となった。(日本の貧困についてまでは、考えを広げることができなかった。)



↑他グループの意見を見て、真剣に話し合う児童たち



↑完成したワークシート

7限目

貧困からぬけ出すために、日本の国ができること

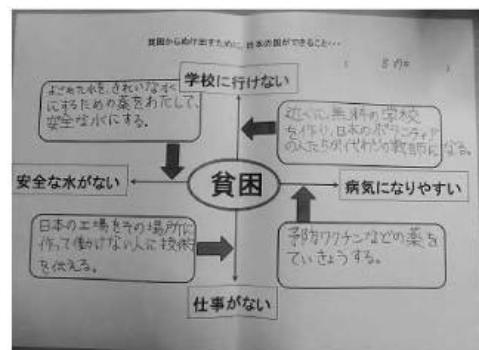
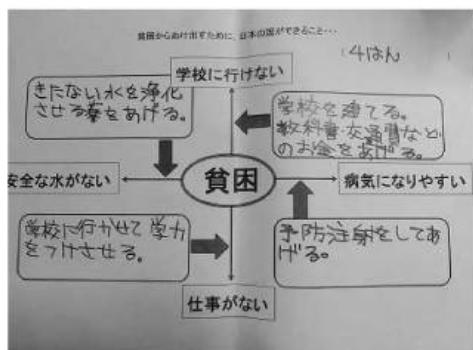
ねらい：国際協力の中の、ODAについて知る。

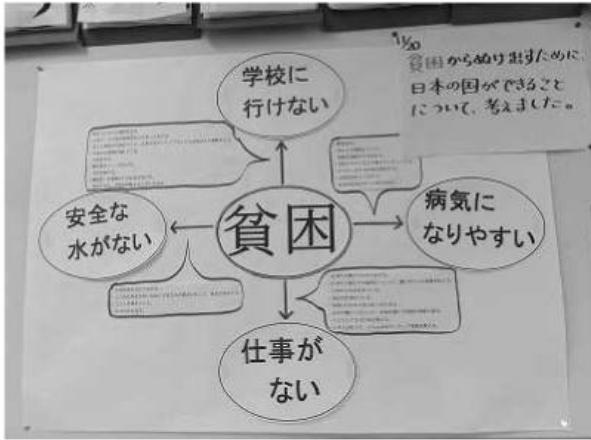
7・8限で国際協力のことについて学習するが、7限目は「日本の国」としての協力（ODA）、8限目は自分たちもできること（NPO）、という区別で児童には知らせた。

- 前時にみんなで広げた貧困のイメージを想起させ、そのイメージを大きく4つにまとめたものを黒板に示す。（学校に行けない、病気になりやすい、仕事がない、安全な水がない）
- 開発途上国が、これらの問題つまり貧困から抜け出すためには、自分たちだけの努力では解決できないという事実を児童から引き出し、ではどうしたらいいか？と問い合わせかける。
- 世界の中でも経済的に発展した先進国の協力・支援が必要であることを知らせ、どんなことができるかを、一人ひとりで考えてみる。

全員の考えをグループで1枚のワークシートにまとめ、発表する。

- ベトナムで出会った日本人（JICA事業・青年海外協力隊）の活躍をパワーポイントで見せる。





←全班の意見を、模造紙にまとめたもの

児童の反応

- ・ベトナムで活躍している日本人がたくさんいて、いろんな活躍をしていることが分かった。
- ・JICAは、国に合わせた人を送り、日本人がその場で活躍することが分かった。

所感

- ・個人で、そしてグループでODAの事業を予想させ、最後に実際のJICA事業を紹介したことで、児童の漠然としていた考えが明確になっていったのではないかと考える。
- ・豊かな国、日本に生まれた責任として、自分たちの国が困っている国を支援している現状をしっかり知らせ、それらの事業に誇りを感じてもらいたいという願いをもって、授業をしてきた。児童の反応を見る限り、ある程度達成できたように感じている。
- ・子どもである自分たちには「日本の国がしていること」は大きすぎる。何かもっと身近なところでできることはないかと感じさせ、次時につなげたい。

8限目

世界じゅうの子どもたちとともに ～ぼくたち・わたしたちができる国際協力～

ねらい：国際協力の中のNGOの活動や個人でできることについて知る。

国ができることとは別に、自分でもできる国際協力という意味で、是非知らせたかった。そして、これから的生活で、自分から進んでそのような活動に参加したいと考える姿勢を期待している。

○開発途上国が貧困からぬけ出すための国際協力の第2弾として、ぼくたち・わたしたちができることについて考える時間とした。最初は「自分たちにできること」についてイメージがわからなかつたようだったが、例を挙げながら一緒に考えていくと、少しづつ考えがまとまってきたようだった。

○いくつかの身近なNGO活動について調べたことを、資料や写真を見せながら紹介した。

○最後に教師からのメッセージとしてパワーポイント「あなたの夢はなんですか？」を見せて終えた。

児童の反応

- ・自分自身でできることは募金と寄付くらいしかないとと思っていたけど、想像以上に多くのことができることを知った。
- ・1年間に2000万トンも食料が捨てられることが分かった。
- ・服、くつ、はがき、ペットボトルなどがすごく活躍していることが、すごいと思った。
- ・世界中にはいろんな人がいて、私たちはたまたま日本に生まれたので、もしかしたら私も貧困だったかもしれないから、募金などをしたいと思った。

9限目

同じ空の下で

ねらい：同じ地球に生きている、同じ人間として国際親善を考える。

○今までの学習の総振りかえりとして、一番心に残っている学習について書かせた。

児童の反応

○「同じ空の下で」

- ・3秒に一人小さな子供が亡くなっていることに驚いた。自分たちは、日本が豊かなことに感謝しなければいけないと思った。

○「世界がもし100人の村だったら」

- ・私は中国人の役割をして、アジアの飴10個のうち5個が日本に行ってしまった時は、とても驚いた。

○「ベトナムについて」

- ・ベトナムの町の様子が分かっておもしろかった。
- ・バイクがとても多くて、5人乗りをしていたことが心に残っている。

○「貧困について」

- ・ぼくは学校に行けることを当たり前だと思っていたけど、感謝しないといけないと思うようになった。
- ・当然であたり前と思っていることが幸せで感謝しないといけないと思う。

○「貧困から抜け出すために国ができること」、「貧困から抜け出すためにはぼくたち・わたしたちができること」

- ・日本や色々な国同士が協力し合うことが大切だと分かった。
- ・私たちが「やろうとしない、興味をもたない」では、苦しい人は苦しいまま死んでしまうことが分かった。

所 感

- ・児童は、思っていた以上によく理解し、よく考えていてくれたことが分かり、嬉しい気持ちになった。
- ・今までの学習を学習のままで終わらせるのではなく、何か一緒に行動が起こせるといいなと考えている。

実際に「自分たちができること」に取り組んでいきたいと思う。

これから、学級で取り組んでいきたいと考えていること

- ・ペットボトルのキャップを集めること
- ・使っていない文房具を持ち寄る。など

10限目 幸せとは…

ねらい：絵本の読み聞かせを聞き、本当の幸せについて考える。

○今までの学習を通して、食べ物がなくて、水や電気がなくて、貧困で苦しんでいる人々について学んできた児童は、物に恵まれている自分たちは幸せで、物がない開発途上国の人々は、みんな不幸な暮らしをしていると感じているのではないかと考えるようになった。「幸せを売る男」の読み聞かせをして、本当の幸せとはどういうものなのかについても、考えてもらいたいと考えた。

○これに関連して、国際協力の在り方について、JICAベトナム事務所で聞いた話を紹介し、協力とは押し付けにならないようにしなければいけないことも知らせた。

児童の反応

- ・便利な暮らしだから幸せなわけではなく、自分らしい暮らしをすることが幸せだということを知った。

所感

- ・貧困に苦しみ人々に「与える」ことだけが協力ではないことを伝えたかった。
- ・JICAベトナム事務所でお聞きした「 $A \neq B$ $A + B \rightarrow C$ 」の話がとても心に残っていたので、その話を紹介した。その国の文化や伝統を大事にしながら、新しい形を作り出すことの必要性を知ってもらいたかった。

※ $A \neq B$ $A + B \rightarrow C$ のお話

日本のAという技術を、そのままBという国に持つて行っても、それは適切な協力にはならない。Aという技術とB固有の文化や伝統とを合わせて、新しいCを作り出すこと。それが、国際協力のあるべき姿である。

そのことを伝えるためにも、「幸せを売る男」の絵本は有効であった。便利で文明の利器である、電気やテレビを村に導入し、農業が生活の一部になっている村人を、都会の工場で働かせることは、一見「幸せ」を与えているようにもとれるが、実はそこに住む村人にとっては、「幸せ」はないといいう点で、児童には「本当の幸せ」と合わせて考えさせるよい機会となったと考えている。

今後は、児童の生活の中で、友達への親切や思いやりのあり方についても同様に指導できると考える。

全体を通しての成果と課題

ベトナム教師海外研修では、青年海外協力隊の実際の活動現場を視察させていただいたり、ベトナムでの日本の技術の活躍を目の当たりにしたり、とても有意義な時間を過ごすことができた。しかし、それら全ての経験の中から、児童に何をどのように伝えればよいのかとても悩んだ。

児童たちの意識はまだ狭く、「自分たちの住む日本の常識が世界の常識」と捉えている子どもがほとんどだろうと考えられる。そうではなく、世界は広く、食べ物がなくて困っている子どもたちや、学校に行けなくて知識を得られず、生活に困っている子どもたちが世界にはたくさんいる事実をどうしても伝えたかった。そして、自分たちの生活を振り返り見直してもらいたかった。

その意味では、ベトナムは経済成長が著しく、現地で撮ってきた写真から児童に貧困を考えさせることは難しそうだった。しかし、考え方を少し変えることで、授業のアイデアが浮かんできた。ベトナムでの経験はとても貴重な資料として、児童に感動を与えるだろう。また、ベトナム

で活躍する日本人の姿を伝えることが、世界の貧困について考えさせることにつながるのではないか、と考えた。日本やその他の国の技術支援や協力を得た結果、今のベトナムの発展があることを伝えたいと考えた。

一連の国際理解教育を進めていく中で、私が児童に期待したことは3点あった。

1点目は、異文化に対して興味をもち、抵抗や差別の気持ちをもたない人間になることである。自分と違う人種や文化を避けて通るのではなく、自分から歩み寄って行ける人に成長してほしいと考えた。子どものうちからいろいろな情報に触れ、人種に優劣をつけない公平な人間であってほしいと考えた。今回、児童に紹介できたのはベトナムというたった一つの国的情報に過ぎないが、意欲的に楽しんで見て感じることができていたことが嬉しかった。

2点目は、日本の国の素晴らしさを知り、日本人としての誇りを感じることだ。先進国としての日本の立場、そして開発途上国に対する負っている義務、日本の技術力も含めて、日本という国的世界で果たしている多くのことを知り、そこに生活する日本人としての自信と自覚、そして責任を感じてほしかった。ODAやNPOの様々な活動を紹介したことで、子どもたちは「日本はすごい！」という感想を何度ももらした。今回得た知識や情報を元に、これから少しづつ期待される姿に近づいていってくれるもの信じている。

3点目は、日本に期待されていることを、自分自身で行動できる人間になることである。そのために、「貧困から抜け出すためにぼくたち・わたしたちができること」の授業は意味のあるものだった。自分の生活をふりかえり、無駄使いを見直したり、好き嫌いを反省したりしてほしかった。そして、「開発途上国の人々のために小さなことでも何かしたい」と考えてほしかった。

児童のふりかえりからは、そのことについて多くの記述が見られたので、嬉しい気持ちになった。

以上は、私の期待通りに児童の反応が返ってきたという意味では成果であると言える。しかし、そこには課題が残っている。

児童たちは、日常に流されて結局無駄使いは無駄使いのまま、好き嫌いは好き嫌いのまま、生活していくような気がするからである。表面的な学びで終わってしまう気がするからである。そうならないためには、これから的生活の中で教科に関わらず、また学校のみならず周りの大人们にタイミングよく促されながら、自分自身の考え方として定着させていかなければならないと思う。

今回の国際理解教育は、子どもたちの心の底に種をまいたに過ぎないのではないかと感じている。これから先は、子どもたちの生活する環境と経験次第なのではないか。その種から芽が出て大きな木になる子どももいれば、残念ながら種は種のまま、芽を出すことができない子どももいるのではないか。どの子どもの種からも芽が出るよう、水を与えてあげることが、私たち大人の使命であり、教師の私に与えられた任務のひとつであると自負している。

参考資料

【書籍】

「ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら」開発教育協会

「学校に行きたい！ 国際協力とわたしたち」独立行政法人国際協力機構

「教室から地球へ 開発教育・国際理解教育虎の巻」独立行政法人国際協力機構（JICA中部）

「幸せを売る男」草場一壽 著、平安座資尚 絵（サンマーク出版）

【映像資料】

フジテレビ「世界がもし100人の村だったら」You Tubeより

<http://www.youtube.com/watch?v=WrVEtyGWuvA>

【インターネット】

「世界の子どもたちの夢」<http://homepage1.nifty.com/RED-SILVIA/sekainokol.htm>